

ぼくは、無名の若者たちを中心に、「一フィート運動」の活動を進めることにした。「若者の活動」を補助する組織として沖縄の「良識人」で構成する運営委員会を準備することにした。数十人の「良識人」に直接会い、協力をお願いした。皆、喜んで協力しようと言った。その中から、バランスを考え、仲宗根政善、豊平良顕、池宮城秀意、牧港篤三、大田昌秀、新崎盛暉、宮里悦、宮城悦二郎、石原昌家、外間政彰、福地曠昭の十人を選んだ。ぼくは、仲宗根政善に会長になってもらった。ぼくは、いまでも純粋だが、あの時は本当に純粋だった。成功は間違いなしだ。何の不安もなかった。一九八三年十二月八日、公式に沖縄戦記録フィルム収集運動、いわゆる一フィート<sup>すき</sup>運動を開始した。凄まじい反応が返ってきた。ぼくの事務所の電話は鳴りっ放しだった。「どのように寄付したらよいのか」と申込みが殺到した。ぼくの事務局長としての忙しい日々が始まった。

振り込み先の銀行には連日、寄付金が寄せられた。琉球銀行では職員一人百円、全職員で四十五万円を集め寄付をしてくれた。那覇市職員も労働組合が中心となって、計九十五万円を集め、寄付をしてくれた。全ての小中学校の各クラスの生徒たちも一人百円を寄付してくれた。ぼくはこうして寄付をしてくれた人たちを必ず、新聞とテレビで紹介することにしていたから、新聞社とのスケジュール調整が大変だった。特に、ぼくは子供たちを大事にしていたから、子供たちの写真を必ず新聞に載せるようにした。毎日、寄付の申込が続くのだから、紙面も足りない。そこで、小学生のクラスには二、三日、時には一週間も寄付を待ってもらって、学校に新聞社のカメラマンと一緒にいき、子供たちと記念写真を撮って、それが翌日の新聞に「小さく」載った。だが、あの小さい写真が子供たちにとって、大きな意味があることをぼくは知っていた。ある小学校のクラスでは、ぼくが来るのを一週間も待ち続け、ぼくが教室に入ると、みんながポケットから大事に「保存していた」十円玉や百円玉を集め、三千円ほどの「大金」をぼくに寄付してくれた。沖縄のすべての善意がこの運動に集約されていた。ぼくは連日膨らんでいく、寄付金総額を新聞社に報告し、全国からも寄付金が届けられるようになり、五カ月間で一千万円を突破した。大成功だった。

ぼくは一九八四年四月下旬、アメリカに行き、リチャード・プレリンジャーさんに会い、ぼくが注意深く選んだ最初のフィルム十二本を入手し、那覇に戻った。直ちに那覇市民会館で上映会が開かれた。超満員の盛況だった。那覇市職労の「友人」たちは第二会場を用意してくれて、そこも満員となった。

ぼくが選んだフィルムの中に日本兵の先頭に立ち、白旗を掲げて投降する小さな少女がいた。彼女はカメラに向かってニコリ笑い、印象的な場面だった。後に「その少女は私だ」と比嘉富子さんが名乗り出た。彼女が記した本によれば、日本兵を率いて投降したのではなく、真相は、摩文仁で投降する時、偶然、一緒になった、ということだった。彼女の証言のおかげで、少女の後ろから投降する日本兵という虚像は吹き飛んだ。フィルムは一時の現象を映すだけで、その背景を知らなければ真実は見えてこないことを実感した。ぼくはまだ、比嘉富子さんに会っていない。実はその頃には、ぼくは一フィート運動を離れ、自分の仕事、ドキュメンタリー作家の道を歩き始めていた。

比嘉富子さんも実感しているはずだが、フィルムの中に自分の姿を発見すると、人は心が解き放たれるのだ。そこから、自分が長いこと封印していた「大切なもの」を発見するのだ。ぼくは・反戦平和運動・が大きらいだ。なぜなら、そこには「個人」が存在しないからだ。ぼくは今、ひとりでフィルムを集め、フィルムの中に登場する人々を探し出し、「大切なもの」を個人個人に届ける作業を始めている。ぼくの作業は気の遠くなるような忍耐が必要だが、フィルムの中に登場する人物と出会う時、ぼくの疲れは吹っ飛ぶのだ。その人物の心が解き放たれる時、ぼくの心も解き放たれる。それが、ぼくの喜びだ。

※赤字部分が琉球新報社長を交えた編集会議の結果、書き換えるよう注文され、不本意に書き換えて差し障りのない文章にした部分。

ぼくは、無名の若者たちを中心に、「一フィート運動」の活動を進めることにした。「若者の活動」を補助する組織として沖縄の「良識人」で構成する運営委員会を準備することにした。数十人の「良識人」に直接会い、協力をお願いした。皆、喜んで協力しようと言った。その中から、バランスを考え、仲宗根政善、豊平良顕、池宮城秀意、牧港篤蔵、大田昌秀、新崎盛暉、宮里悦、宮城悦二郎、石原昌家、外間政彰、福地曠昭の十人を選んだ。ぼくは、仲宗根政善に会長になってもらった。ぼくは、いまでも純粋だが、あの時は本当に純粋だった。成功は間違いなしだ。何の不安もなかった。一九八三年十二月八日、公式に沖縄戦記録フィルム収集運動、いわゆる一フィート運動を開始した。凄まじい反応が返ってきた。ぼくの事務所の電話は鳴りっ放しだった。「どのように寄付したらよいか」申込みが殺到した。ぼくの事務局長としての忙しい日々が始まった。

振り込み先の銀行には連日、寄付金が寄せられた。琉球銀行では職員一人百円、全職員で四十五万円を集め寄付をしてくれた。那覇市職員も労働組合が中心となって、計九十五万円を集め、寄付をしてくれた。全ての小中学校の各クラスの生徒たちも一人百円を寄付してくれた。ぼくはこうして寄付をしてくれた人たちを必ず、新聞とテレビで紹介することにしていたから、新聞社とのスケジュール調整が大変だった。特に、ぼくは子供たちを大事にしていたから、子供たちの写真を必ず新聞に載せるようにした。毎日、寄付の申込が続くのだから、紙面も足りない。そこで、小学生のクラスには二、三日、時には一週間も寄付を待ってもらって、学校に新聞社のカメラマンと一緒にいき、子供たちと記念写真を撮って、それが翌日の新聞に「小さく」載った。だが、あの小さい写真が子供たちにとって、大きな意味があることをぼくは知っていた。ある小学校のクラスでは、ぼくが来るのを一週間も待ち続け、ぼくが教室に入ると、みんながポケットから大事に「保存していた」十円玉や百円玉を集め、三千円ほどの「大金」をぼくに寄付してくれた。沖縄のすべての善意がこの運動に集約されていた。ぼくは連日膨らんでいく、寄付金総額を新聞社に報告し、全国からも寄付金が届けられるようになり、五ヵ月間で一千万円を突破した。大成功だった。

ぼくは一九八四年四月下旬、アメリカに行き、リチャード・プレリンジャーさんに会い、ぼくが注意深く選んだ最初のフィルム十二本を入手し、那覇に戻った。直ちに那覇市民会館で上映会が開かれた。超満員の盛況だった。那覇市職労の「友人」たちは第二会場を用意してくれて、そこも満員となった。

ただ、そうした裏でぼくの「一フィート運動」を乗っ取る動きが進行していたのだ。婦人連合会は一フィート運動の事務所を婦人連合会内部に持ち込もうと画策し、ある政党の連中はぼくの追い出し工作を図書館内で連日、進めていた。沖縄教職会の福地もぼくを事務局長から外し、那覇市職労のM君に事務局長になるよう打診していた。実は、この時点で、ぼくの仕事は乗っ取られていた。彼らは一千万円の寄付金も、机も、電話もすべて取り上げていた。運営委員会がぼくに連絡もなく開かれ、国会で上映会を開く話に彼らが熱中している中に、ぼくは乗り込んで、怒り心頭に発して叫んだ。「これは一体なんだ。これは乗っ取りだぞ。ぼくは明日にも記者会見して発表するぞ」仲宗根政善は「上原君、君がそんなことをすれば、せつかくの運動も丸つぶれになる。我慢してくれないか。」と懇願した。大田昌秀は「私のメンツを潰してくれるな」と怒鳴った。こうしてぼくは自分がつくった「一フィート運動」を乗っ取られてしまった。その後、一フィート運動は一ミリ運動となり、今や仕事をせず、事実上破綻している。さっさと解散すべきだ。

ぼくは怒りを胸に秘め、数年間、作家活動を続けていたが、アメリカの公文書館に通う中で、ベトナム・メモリアルを何度か訪れるうちに、ある発想が浮かんできた。ベトナム・メモリアルに刻まれているのはアメリカ兵の名前だけだ。ベトナム人戦没者の名前はない。

※赤字部分が琉球新報社長を交えた編集会議の結果、書き換えるよう注文、削除された部分。

次回分(181回目)で沖縄戦メモリアル構想(後の「平和の礎」)の舞台裏について発表するつもりだったが、連載打切りになりそれができなくなった。